

【直訳】

22 そして 来る 会堂長たちの一人が、 名前は ヤイロ、

そして 見て 彼を 彼はひれ伏す 彼の足もとに

23 そして 彼は願う 彼に **しきりに** 次のことを言いながら、

「私の小さな娘が 終わりに ある、

ようにと 来て あなたが置く 両手を 彼女に

ようにと 彼女が救われる そして 彼女が生きる」。

24 そして 彼は出かけた 彼と共に。 彼らは迫っていた 彼に。

そして 従っていた 彼に 多くの群衆は、 そして 彼らは迫っていた 彼に。

35 まだ 彼が 話している間に

人々が来る 会堂長（の家）から 次のことを言いながら

「あなたの娘は 死んだ。 なぜ まだ あなたは煩わすのか 先生を」。

36 それで イエスは そばで聞き 語られた言葉を

彼は言う 会堂長に、 「恐れるな、 **ただ 信じなさい**」。

37 そして 彼は許さない 誰にも 彼と共にいて来ることを

ペトロと、ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ以外は。

38 そして 彼らは来る 会堂長の家の中に、

そして 彼は見る

騒ぎを そして 泣く者たちを そして 嘆く者たちを **しきりに**

39 そして 入って 彼は言う 彼らに、

「なぜ あなたたちは騒いでいる そして あなたたちは泣いている

子どもは 死んではない しかし 眠っている」

40 そして 彼らはあざ笑っていた 彼を。

だが彼は、 追い出して 皆を、

連れて行く 子どもの父と母を そして 彼と共にいる者たちを、

そして 彼は入る 子どもがいた場所に。

41 そして 取って 子どもの手を、 彼は言う 彼女に、

「タリータ クーム。 これは 翻訳される

『少女よ、 あなたに 私は言う、 起きよ。』」

42 そして すぐに 起き上がった 少女は そして 歩き回っていた、

なぜなら彼女はあった 十二歳で。

そして 彼らは驚嘆した 「すぐに」 大きな驚嘆で。

43 そして 彼は命じた 彼らに **しきりに**

ようにと 誰も 知らない これを、

そして 彼は言った 彼女に食べることが与えられることを。

C

B

A

「新共同訳」

22 会堂長の一人でヤイロという名の人が来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、23 しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」24 そこで、イエスはヤイロと一緒に出かけ、行かれた。大勢の群衆も、イエスに従い、押し迫って来た。

35 イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」36 イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。37 そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。38 一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、39 家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。41 そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。42 少女はすぐに起き上がり、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。43 イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物を少女に与えるようにと言われた。

①構成

②三つの段落のいずれにも「彼（イエス）は言う」が現れ、傍線を付けたイエスの言葉に注意を向けさせている。

③「しきりに」もすべての段落に使われている。Aでは会堂長が娘の救いをしきりに願い、Bでは人々が娘の死をしきりに嘆いており、Cではイエスが沈黙をしきりに命じている。会堂長と人々とイエスは、各人各様に「しきりに」行動している。その相違がテーマと関わっている。

②しきりに願う会堂長（22―37節）

④会堂長は会堂の最高責任者であり、礼拝や建物の管理運営を行ない、地域共同体の諸問題にかかわることもあったと見られている。選任方法ははっきりしない。その地域の有力者が実質的な職務にはつかないが、名誉称号的に、この名で呼ばれることもあった。会堂長ヤイロは自らの体面を捨て、イエスの足もとにひれ伏す。「足もとにひれ伏す」は、身分の高い、または神的な人物に対して何かを懇願しようとするときに示す謙遜のしるし。娘の命のためにイエスにすがるヤイロの必死の姿を強調している。

⑤「小さな娘」は「娘」の指小形（小ささを表す接辞を付けて、親愛の情を表す語形）。小さな娘は「終わりにある」。これは「瀕死の状態にある」を意味する。この娘はすでに十二歳になっているが、彼にはいとおいの娘であって、あくまでも「小さな娘」である（23節）。

⑥ヤイロは死になつた娘を救うようにとイエスに「しきりに」願う。

⑦23節三行目の「ように」とは命令法の代用であり、「来て、手を置いてください」の意味。

この娘が生きていることを願う会堂長の「しきりき」の中に、最愛のものを失う恐れに脅えながら生きる人間の姿が端的に表されている。

① 23節四行目の「ように」とは、構文的には三行目と同じである。命令の意味、あるいは結果、または目的を表す従属節と取ることも可能。二つの動詞「救われる」と「生きる」を「直つて、助かるように」と訳し、両者ともに病気からのいやしを表すという訳、あるいは「助かり（救われ）、生きる」と訳して、別の事柄を表現する動詞とする訳がある。

◎ 「イエスはヤイロと共に出かけた」。イエスはヤイロの懇願に行動で応える。会堂長の家へ向かう途中、25―34節の出来事が起きる。十二年間病に苦しむ女性をイエスがいやす間に、ヤイロの娘の死が告げられる。

④ 35節一行目「まだイエスが話している間に」と三行目「なぜまだあなたは先生を煩わすのか」は、「まだ」で対応している。イエスが他の者のいやしに時間を使っている間に流れ去った時間を強調している。「なぜまだあなたは先生を煩わすのか」は修辭的疑問文なので、「煩わす必要はない」のような訳が可能。

◎ 娘の死の知らせを「そばで聞いた」イエスはヤイロに語りかける。「そばで聞く」は「小耳にはさむ」の意味と「聞き流す」の意味がある。前者であれば、まだ話をしていてイエスが耳をとめて中断し、ヤイロに語りかけた、意味になる。「聞き流して」と訳すと、イエスの神への信頼を表すことになる。

⑤ イエスは「恐れるな、ただ信じなさい」と呼びかける。恐れているヤイロにイエスはそれを止めるように命じる。何を信じるのか、その対象は述べられていない。希望がまったくなくなった「無」へと落ちて、無を超えたところにイエスの信じる方はいらる。イエスの信じる神への信頼をイエスは求める。

### ③ しきりに泣く人々（38―40節前半）

① 会堂長の家に着くと、人々は娘の死を「しきりに」嘆き悲しんでいたが、この嘆きはイエスの目には「騒ぎ」と映る。イエスは「なぜ騒いでいるのか。子どもは死んだのではない。眠っているのだ」と語る。無を超えたところの方を信じるイエスには、娘の死は「眠っている」ことでしかない。「眠っている」という動詞は、文字通りに「眠り」を意味するほかに、「死の眠り」を意味することもできる（1テサ5:10）。少女は死んだ。しかし、生きる希望を与える神を「無」の向こう側に見るイエスが来るとき、「死」はもはやその力を失って「眠り」となる。なぜなら、イエスは死者を「起こす」、すなわち「復活させる」権能を持つからである。

② 人々の嘲笑は、そのイエスを認めずに目の前の現象に捕らわれることに由来する。人々は「しきりに」嘆いているが、イエスを通して現れようとする神の力に気づかないならば、それは「騒ぎ」でしかない。そのような人々を追い出してから、イエスは子どもがいるところへと入っていく。

### ④ しきりに命じるイエス（40節後半―43節）

① この段落冒頭の「だが彼は」によって、あざ笑う人々とイエスとの対比が強調される。イエスは37節でも群衆がついて来るのを許さなかったが、ここでも人々を追い出している。奇跡は人を楽しませる見世物でもなければ、人が自分のために利用すべきものでもない。神に身を開いた者だ

けが奇跡を奇跡として受け入れることができる。

㉓ 節で会堂長がイエスに求めたことは娘に「両手を置く」ことであった。しかし、イエスは子ども両親と三人の弟子だけを連れて子ども部屋に入ると、その手を取って、「少女よ、起きよ」と命じる。「起こす」（エゲイロー）は、新約聖書中、イエスの復活を表すのに多用される。この物語も「よみがえり」に関係し、復活についての象徴的な意義を持つ。イエスのいやしは「手を置く」という魔術的な動作によってではなく、「少女よ、起きよ」と語りかける言葉によって引き起こされる。その言葉の力強さは、少女が「すぐに」起きあがって歩き出したことに示されている。「あなたに私は言う」はマルコの挿入であり、イエスの権威を強調する。

㉔ 「タリータ クーム」。イエスが用いていたアラマイ語のまままで伝えられている。このように、アラマイ語の原語がそのまま残されたのは、イエスの肉声を残すためであり、イエスの言葉の力強さを体験した者の信仰の表明でもあっただろう。また、この奇跡物語の背景には、エリヤがサレプタの女の息子を生き返らせ、エリヤの弟子エリシヤがシュネムの女の子どもをよみがえらせた故事がある（王上一七17以下、王下四18以下）。

㉕ イエスは「手を取って」語りかける。会堂長の家に向かう途中、十二年間、出血に苦しむ女性がイエスに触れていやされる。家に入ったイエスは「眠った」娘の手を取って、彼女を起こす。ユダヤ教社会の価値観から言えば、死者や婦人病の女は「汚れた」ものであり、触れてはならないものであった（一40以下も参照）。

㉖ 少女は起き上がり、「歩き回っていた」。この動詞の時制は未完了過去形。未完了過去形は、継続反復する過去の動作、あるいは過去の動作の開始を表すことができる。前者の意味で使われているなら、「歩き回り続ける」であり、後者であれば「歩き始める」を意味することになる。少女は「十二歳」であった。会堂長の家への途中でいやされた女性は十二年間、病に苦しんでいたが、この少女が今まで生きた長さと同じである。

㉗ 「彼らは驚嘆した…大きな驚嘆で」。4章41節の「大きな恐れを恐れた」と同じ言い回しであり、動詞と動詞の目的語とが同じ語根の言葉である。このような言い回しの背景にはヘブライ語の強調構文があり、驚きの大きさが強調される。

㉘ 少女を死から救ったイエスは、「これを誰にも知らせるな」と命じる。奇跡が興味本位に扱われ、うわさの種とされるなら、奇跡が示す神の愛が影をひそめてしまう。だから、人々を追い出し、奇跡を目の当たりにした人にも沈黙を命じる。しかし、生き返った少女はいずれ人々に姿を見せるのだから、この沈黙命令には実質的な意味がない。それでもマルコがそれを記すのは、読者に奇跡の意味を思い起こしてほしいからである。マルコ福音書に繰り返し現れる沈黙命令は、見える奇跡の向こうに神の力をしっかりと見るように、というマルコの促しである。

## ⑤ 神へと目を向ける

ヤイロが娘の死を恐れ、人々が騒ぐ間も、イエスの目は神へと向けられている。だから、25—34節の出来事によってヤイロの家への到着が遅れ、娘が死ぬことになってもイエスには不安がない。神の勝利を知っているからである。イエスは、娘の生死という現象に捕らわれている者の目を、神へと向けさせる。奇跡には神が働いている。その働きを見つめるなら、神がどういふ方であるかを知ることができる。イエスは奇跡を通して神を知ること「しきりに」願っている。